



幕末維新 の おかやま



ももっち・うらっち
と一緒に
たずねてみよう！



岡山県マスコット
ももっち・うらっち

はじめに

ペリー来航や、^{ぼ しん}戊辰戦争、^{はいほん ち けん}廃藩置県という出来事を教科書で学んだと思います。人物では、^{さかもとりょうま}坂本竜馬の名前を知らない人はほとんどいないでしょう。^{さいごうたかもり}西郷隆盛、^{かつらこ}桂小五郎、^{ごろう}大久保利通の「^{おおく ほとしみち}維新の三傑」^{い しん}も多く^{さんけつ}の人はご存知でしょう。

彼らが活躍したのは今から150年くらい前、約260年続いた江戸幕府の支配が終わりを迎えようとしていた頃のことでした。この江戸時代の終わりを「幕末」と言います。そして幕末以降、近代国家の建設を目指した政治や経済など社会全般にわたる変革を「^{めいじ いしん}明治維新」と呼んでいます。

では、この変革の時期、岡山県ではどのようなことが起きていたのでしょうか。このガイドブックでは、ペリー来航から廃藩置県にいたる時期（2ページ年表参照）を中心に、当時の岡山県で起きた出来事や人物を紹介していますので、それらに関わる身近な文化財に興味をもってもらいたいと思います。

ペリー来航

1853年、アメリカ東インド艦隊司令長官ペリーが、大統領の国書を持って浦賀（神奈川県）に軍艦でやってきて幕府に開国を求めたことをいいます。幕府は、翌年再び来日したペリーと日米和親条約を結び、幕府の外交政策は大きく転換しました。

近代

人類の歴史を大きく分けた場合に、原始、古代、中世、近世に続く時代区分。日本では江戸時代を近世、明治時代から昭和戦前期までを近代と呼びます。



年 表

年 号	日本の出来事	岡山県に関する出来事
嘉永6(1853)年 か えい	浦賀(神奈川県)にペリー来航 うら が	
安政元(1854)年	ペリー再来航し、日米和親条約締結 ていけつ	
安政5(1858)年	井伊直弼、大老就任 日米修好通商条約締結 たいごく 安政の大獄始まる	
万延元(1860)年	大老井伊直弼暗殺(桜田門外の変)	
文久2(1862)年	老中安藤信正襲撃(坂下門外の変) あん どう のぶ まさ しゅうげき	松山藩主板倉勝静、老中就任 いた くら かつきよ
文久3(1863)年	長州藩、攘夷決行 はん じょう い 外国奉行池田長発、フランスへ派 ふ ぎょうしげ だ なが おき 遣される けん	鴨方藩、青佐山に台場建設 おお さ やま だい ば (3ページ参照)
元治元(1864)年	池田屋事件 第1次長州征討 四国艦隊下関砲撃事件 ほうき	岡山藩、下津井、小串などに台 場建設(4ページ参照) 松山藩主板倉勝静、老中罷免 ひ めん
慶応元(1865)年 けい おう	14代将軍徳川家茂、征長の勅許を得る いえもち せいちやう ちよつきよ	松山藩主板倉勝静、老中再任
慶応2(1866)年	薩長連合(薩長同盟)成立 第2次長州征討 15代将軍徳川慶喜就任 よしのぶ	倉敷浅尾騒動(備中騒動) あさ お そうどう
慶応3(1867)年	三河(愛知県)でええじゃないか始まる 徳川慶喜、大政奉還を上表 たいせい(ほうかん) じょうりよう 坂本竜馬、中岡慎太郎暗殺(近江屋 事件)	鶴田藩成立(9ページ参照) 倉敷などでええじゃないか始 まる
明治元(1868)年	鳥羽・伏見の戦い(戊辰戦争開始) ぼ しん 五箇条の誓文、五榜の掲示 ご かじよう せいもん ご ぼう けい じ	玉島事件(10～12ページ参照) 神戸事件(15ページ参照)
明治2(1869)年	薩長土肥四藩主、版籍奉還の上表 はん せき ほうかん 五稜郭の戦い(戊辰戦争終結) 版籍奉還許可 ご りようかく	
明治4(1871)年	廃藩置県 はい はん ち けん	岡山県、北条県、深津県(のち 小田県)設置(16～18ページ参照) ほうじよう ふか つ お だ

嘉永^{かえい}6 (1853) 年、ペリーが浦賀^{うらが}（神奈川県）に来航して開国を要求し、翌年日米和親条約が結ばれたことによって、日本のいわゆる鎖国政策^{さこく}は終わりを迎え、日本と外国との関係は大きく変わることになりました。その後、幕府内の開国派と攘夷派^{じょうい}が対立する中で、次第に攘夷派が優位となり、外国船に対する警備体制が整えられることになり、大砲^{たいほう}を作るため韮山^{にらやま}（静岡県）に反射炉^{はんしゃろ}が建設され、江戸湾には台場^{えどわん だいば}が築かれました。

文久^{ぶんきゅう}3 (1863) 年、幕府は岡山藩^{はん}に対して、領内海岸に台場を整備し、警備することを命じました。これを受けて、岡山藩は、下津井、小串、外波崎に台場を築いたほか、鴨方藩領^{おおさやま}青佐山にも台場が設置されました。これらの台場は実際に使用されることはありませんでしたが、当時の外国に対する姿勢を示すものとして貴重です。

反射炉

天井部分に熱を反射集中させて金属を溶解するための炉。これを用いて大砲が製造された。

● 青佐山の台場跡^{おおさやま}（浅口市寄島町）

市指定史跡



青佐山の台場跡

瀬戸内海に突き出た海沿いに位置する青佐山は、笠岡諸島や塩飽諸島を望むことができます。鴨方藩は幕府の命令が出される以前から、台場

を築く計画を立てていたようで、文久3 (1863) 年11月には完成しました。鴨方藩主池田政詮^{まさあき}（のちの章政^{あきまさ}）が案内し、岡山藩主池田茂政^{もまさ}も訪れています。

台場のあった場所では、現在でもその様子を見ることができます。山の中腹に作り出された平坦面があり、その周囲を巡る土



壘が残っています。2門の大砲が設置されていたとされ、周囲の土壘には砲門を示す窪みがあります。南側の海を望むと、三郎島や寄島の干拓地が見えます。

●^{しも つ い}下津井の台場跡（倉敷市下津井）



下津井の台場跡

岡山藩領であった下津井にも台場が設けられました。下津井港の西側、祇園神社のある瀬戸内海を望む小高い岬の先端に台場の周囲を囲む石垣が残されています。現在、台場の上に上がることはできませんが、下津井の沖合は現在多くの船が航行しており、台場が築かれるのにふさわしい場所であったことを実感することができます。

台場
大砲を据え付ける砲台のこと。
幕末に各地に建設された。



よこ い かみ
●横井上の台場跡 (岡山市北区横井上)

市指定史跡



横井上の台場跡

外国船を対象とした台場以外に、岡山藩は、城下の防御を目的とした台場も築いています。横井上の山上に築かれた台場がこれにあたります。台場が築かれた場所は、岡山と津山を結ぶ津山往来沿いに位置します。

古墳時代中期に造られた古墳の高まりを利用して築かれており、円形の砲台に、砲座が設けられていました。周囲には土塁が築かれ、藩兵がここで大砲の射撃練習をしたと伝えられていますが、実際に戦いで使用されたことはありません。

現在でも土塁が一部残っており、古墳と台場が重なった横井上お台場遺跡として岡山市の史跡に指定されています。

親藩

徳川氏一門の大名のこと。
尾張徳川家・紀伊徳川家・
水戸徳川家の三家(御三家)
や越前・会津の松平家など。



周辺
路
図





なが おき 池田長発

池田長発は、天保8(1837)年、旗本池田^{ながのり}長休^{ながひる}の四男として江戸に生まれ、嘉永5(1852)年、井原に陣屋を構えていた池田^{かえい}長^か湊^{とく}の養子となり、その後、家督を相続しました。文久2(1862)年に目付、翌年には外国^{ふぎょう}奉行^{ばつてき}に^か抜擢^{とく}されました。当時の幕府は、攘夷論の高まりを受けて、開港していた横浜港を閉鎖するための交渉を行うため、使節団をヨーロッパに派遣することになり、長発が正使に任命されて、文久3(1863)年12月にフランスへ向けて出発しました。翌年3月にフランスに到着し、4月には当時のフランス皇帝ナポレオン3世^{えいせい}に謁見^{とうちやく}しました。結局、交渉の目的を果たすことはできず、長発は西洋文明を吸収して軍勢力を強化することの必要性を痛感し、イギリス・オランダとの交渉は中止し帰国しました。帰国した使節団に対して、幕府は上陸を禁止し、独断で帰国した長発は解任され、知行地^{ちぎょうち}も半分に減らされました。慶応2(1866)年には罪を許されて軍艦奉行となりましたが、病のため辞職しました。

外国奉行

日米修好通商条約締結後に新たに設置された幕府の外交を担当する役職

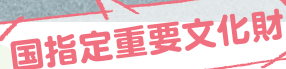
知行地

支配権を与えられた土地のこと



井原知行所陣屋跡（井原市井原 井原市立井原小学校内）

あさ お



大橋家住宅（倉敷市阿知）

元治元(1864)年の第1次長州征討の後、長州藩では慶応元(1865)年、高杉晋作ら
 が藩の実権を握り、倒幕の動きを強めていました。これに対し、幕府は朝廷から長州
 藩を攻撃する許しを得て第2次長州征討の準備を進めていました。そのような中、慶
 応2(1866)年4月、長州藩第二奇兵隊の一部隊士が隊を脱走し、その後、倉敷代官
 所陣屋、浅尾藩陣屋を焼き討ちしました。これを倉敷浅尾騒動（または備中騒動）と
 呼んでいます。

第二奇兵隊の脱走隊士たちを率いていたのは、立石孫一郎で、彼は播磨国佐用郡（兵庫県）の大庄屋に生まれ、父親の代わりに大庄屋の仕事を務めていましたが、のちに今の津山市の立石家の養子となり、その後立石家と婚姻関係にあった倉敷村大橋家の養子となっていた人物です。のちに倉敷を出て、第二奇兵隊に入隊しました。幹部となっていた立石は、隊の処遇に対する藩への不満や、なかなか戦いが始まらないことへの苛立ちなどから、100人余りの隊



士とともに、隊を脱走し備中連島に上陸し、倉敷代官所陣屋（現在の倉敷アイビースクエアの場所）を襲いました。急な襲撃で、守りも手薄であったことから、抵抗はほとんどなく陣屋は占拠されました。脱走隊士たちは、宝福寺（総社市井尻野）に滞在した後、いったん松山往來を北へ進んだ後、突然反転し、浅尾藩陣屋を襲い占拠しました。幕府の命を受けた岡山藩兵と幕兵の攻撃を受け、立石ら脱走隊士の多くは長州藩領に逃げ帰りましたが、長州藩は彼らを厳しく処罰し、立石も殺害されました。



倉敷代官所の掘跡（倉敷市本町）

市指定史跡



浅尾藩陣屋跡（総社市門田）

長州征討

幕府が長州藩を攻撃した戦争。元治元(1864)年の第1次、慶応2(1866)年の第2次の二度起きています。長州征伐、長州戦争、四境戦争ともいいます。



たず た はん 鶴田藩の成立



じゅなん ひ
殉難碑（津山市桑下 鶴田藩西御殿跡）

鶴田藩は、幕末から明治時代初めにかけて存続した藩です。石見（今の島根県西部）^{まつだいらたけあきら}浜田藩主松平武聰は、水戸藩主^{なりあき}徳川斉昭の子で、鳥取藩主^{よしのり}池田慶徳、岡山藩主^{もちまさ}池田茂政の弟にあたる、池田家とゆかりのある人物です。

^{けいおう}慶応2（1866）年の第2次長州征討のとき、武聰は長州軍に敗れて、住んでいた浜田城に自ら火を放ってのがれました。このため翌年、現在の津山市から美咲町などにあった8000石の領地（飛地）に移り住みました。武聰は、幕府滅亡後に新政府から旧幕府領であった^{たつの はんあずかりち}龍野藩預地2万8000石を与えられ、^{けいおう}慶応4（1868）年6月に鶴田藩が成立しました。

さらに明治2（1869）年には藩の石高は6万1000石となり、浜田藩時代の石高に戻りました。

鶴田藩では、藩庁や藩主の館の建設が計画され、館は現在、西御殿と呼んでいる場所に明治4（1871）年6月に完成し、藩主一家はここに^{にしとてん}移り住みましたが、直後の7月に^{はいはんちけん}廃藩置県が行われ、藩主武聰は鶴田藩知事の職を解かれ、東京へ移ることになりました。西御殿跡には長州征討などで亡くなった藩士を慰霊する石碑が建てられています。



玉島事件と熊田^{くま た あたか}怡



西から見た玉島の遠景

江戸時代の玉島は、瀬戸内海交通と高瀬舟を利用した高梁川河川交通が交差する港として大変栄えました。この玉島^{たましま}繁栄^{はんえい}の基礎が築かれたのは、備中松山藩^{びんしゅ}池田氏の断絶によって成羽藩から移った水谷氏の時代のことでした。水谷勝隆は玉島新田の開発を進め、このとき新田開発の成就を祈願して祀られたのが羽黒神社（倉敷市玉島中央町）です。息子の勝宗は、玉島の港を浚渫して、それまでより大きな船も入港できるようになり、玉島は松山藩の外港として繁栄しました。

その玉島が舞台となり、旧幕府側の備中松山藩と、新政府側の岡山藩の間で起きたのが玉島事件です。慶応4（1868）年1月、京都近郊で、明治新政府軍と旧幕府軍が衝突し（鳥羽・伏見の戦い）、戊辰戦争が始まりました。備中松山藩はこの時、大坂城周辺の警備にあたっていました。鳥羽・伏見の戦いでの旧幕府軍の敗戦を受け、藩主板倉勝静（13ページ参照）は徳川慶喜とともに江戸へ下りましたが、熊田^{くま たあたか}怡に率い



さいそうてい
西爽亭（倉敷市玉島）

登録有形文化財

られた松山藩兵は藩主の命により帰国することになりました。一方、新政府からいわゆる「錦の御旗」を与えられて松山藩を討つ命令を受けていた岡山藩は家老伊木忠澄を総督とする兵を松山城に送りました。備中松山藩では抵抗するか降伏するか議論されましたが、板倉家の断絶を免れるため、藩論を謹慎恭順に統一し、城下町から退去し、備中松山城は戦うことなく開城されました。

大坂から帰国した熊田らは藩領である玉島に到着しました。熊田は松山での謹慎を願う旨の書状を松山に送り、これを受けて松山藩は熊田以下の帰還した藩士の助命を求めましたが、岡山藩の強硬な対応から熊田の責任は免れないと判断し、これを熊田に伝えました。岡山藩は次々と藩兵を玉島に派遣し1月22日には玉島を取り囲み、人々が戦火を恐れて逃げ出す状況になりま





熊田神社（高梁市内山下 八重籬神社境内）

した。熊田恰は部下の助命嘆願書を作成し、自らは現在の西爽亭の一室で自刃しました。これによって残された藩兵150人余りは救われ、玉島の町も戦火を免れました。

その後、松山藩は八重籬神社境内に熊田神社を建てるとともに、その嫡子を取り立てて、その功績を認めました。また、明治3（1870）年には玉島を戦火から救った熊田を祀る熊田神社が羽黒神社（倉敷市玉島）の境内に建立されています。





いた くら かつ きよ 板倉 勝 静

板倉勝静は、^{む つ しらかわはんしゅまつだいさだなが}陸奥白河藩主松平定永の八男として生まれました。祖父は寛政の改革で知られる老中松平定信です。その後、板倉家の養子となり、嘉永2(1849)年、備中松山藩主となりました。侍講(そばに仕える儒学者)に山田方谷を抜擢して行った藩政改革を成功させると、安政4(1857)年、寺社奉行に任命されました。万延元(1860)年、大老井伊直弼が暗殺されると、寺社奉行に再任され、文久2(1862)年には老中に任命され外交問題では生麦事件への対応にあたり、内政では文久の改革に取り組むなど、幕政の中心として活躍しました。^{けいおう}慶応元(1865)年、老中に再任され、徳川慶喜が15代将軍になると老中首座に任じられましたが、慶喜が大政奉還を決断するとその実現に尽力しました。そして慶応3(1867)年10月14日の大政奉還上表により、江戸幕府は終わりの時を迎えました。

文久の改革

文久2(1862)年に行われた政治改革。公武合体(朝廷と幕府の連携による幕府の安定をはかる考え)の立場をとる島津久光が朝廷を利用して幕府に改革を要求して行われました。

生麦事件

文久2(1862)年、横浜港近くの生麦村で島津久光の行列を横切ったイギリス人を薩摩藩士が殺傷した事件。



が ぎゅうてい
臥牛亭 (高梁市内山下)



市指定重要文化財

勝静が藩庁であった御根小屋の一角に建てた小亭で、2度移築されて、現在に至っています。



やま だ ほう こく 山 田 方 谷

山田方谷は、備中国阿賀郡西方村（高梁市）に生まれました。幼くして新見藩の儒学者丸川松隠^{まるかわしょういん}に学び、一時家業を継ぎましたが、21才のとき藩主板倉勝職^{かつやく}に藩校有終館^{ゆうしゅうかん}への出入りを許され、その後京都、江戸への遊学を経て、32才で有終館学頭となりました。勝職の養子勝静^{かつしやう}の侍講となり、勝静が藩主となると藩財政の責任者として藩政改革を主導し、成功に導きました。勝静の幕政参加^{めつぽう しょうせい}にともなって、政治顧問として活躍しましたが、幕府滅亡後は、新政府からの要請を断り、子弟教育に専念しました。明治元（1868）年には長瀬塾^{ながせじゅく}（高梁市中井町）を開き、明治3（1870）年には母の生誕^{おさかへ}の地、小阪部（新見市大佐）に移り、小阪部塾を開きました。また、閑谷学校^{しずたに}の再興にも協力しました。方谷は、明治10（1877）年、小阪部で亡くなり、小阪部塾の跡地には「方谷山田先生遺蹟碑」が立てられています。また、方谷が母方の祖母を祀るために小阪部に建立した庵^{いおり}は、方谷庵として岡山県指定史跡になっています。

なお、方谷の門人には東京に漢学塾二松学舎^{にしやうがくしゃ}（二松学舎大学の前身）を創設し、大正天皇の侍講も務めた三島中洲^{みしまちゅうしゅう}や、同じく新政府で活躍した川田鸞江^{かわた おうこう}などがいます。



有終館跡（高梁市中之町）

たき ぜん ざぶ ろう 神戸事件と瀧善三郎



瀧善三郎義烈碑（岡山市北区御津金川 七曲神社）

慶応4（1868）年1月、明治新政府は岡山藩に西宮（兵庫県）の警備を命じました。1月11日、岡山藩家老日置帯刀の隊列が三宮神社前を通りがかった時、事件は起きました。フランス兵が隊列を横切ろうとして岡山藩兵と衝突したのです。再三の制止にもかかわらず横切ったフランス兵との間に小競り合いが起こり、岡山藩側が発砲し、これに対抗したイギリス・フランス軍が一時神戸中心部を占拠する事態となりました。諸外国は、日本側に謝罪と賠償を要求し、この要求に新政府は屈し、発砲の命令を下したとして、家老日置氏の家臣で、大砲隊の隊長瀧善三郎が2月9日、神戸の永福寺で切腹しました。切腹には、日本、諸外国の外交官が立会い、立ち会ったイギリスの外交官の著作により西洋にも広く知られることになりました。この事件は、明治新政府が初めて直面した外交問題であり、この問題が瀧の死によってしか解決できなかったという事実は、新政府の対外的に弱い立場をよく表していて、その後の条約改正問題へと続いていくことになりました。

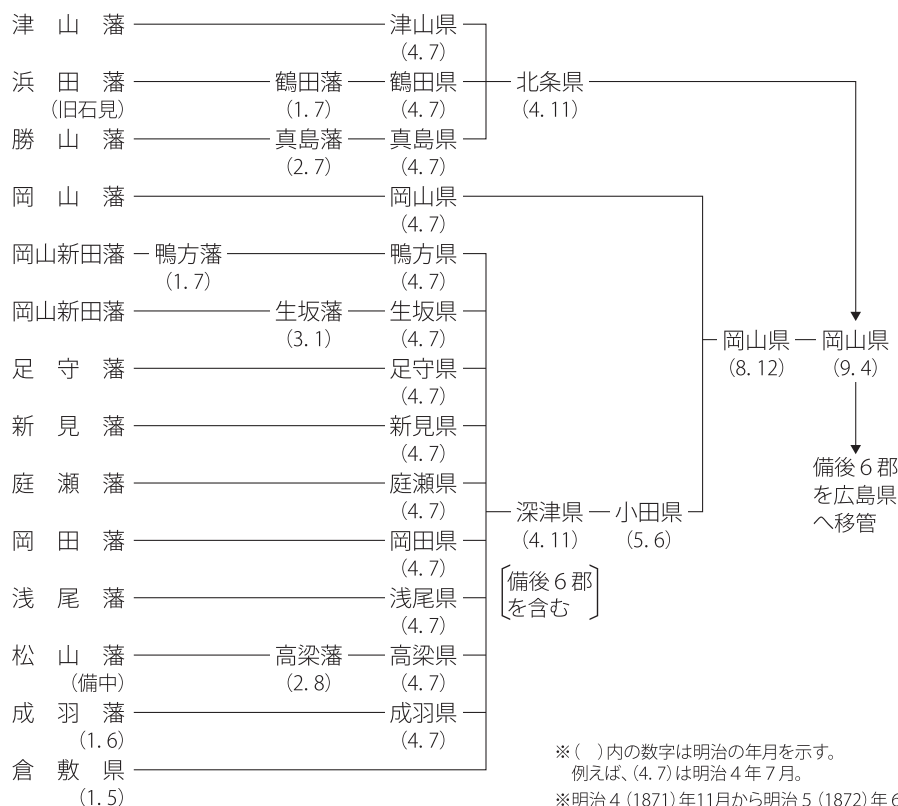


明治政府は、明治2(1869)年の版籍奉還^{はんせきほうかん}後も知藩事^{ちはんじ}として領地における権力をもっていた旧藩主を解任し、東京居住を命じました。藩を廃止^{はいし}し、あらたに府県を置き、府(東京、大阪、京都)には府知事、県には県令が派遣されて、政府に権力が集中する中央集権化が推し進められました。

現在の岡山県域に置かれた県は、明治4(1871)年11月には岡山県、北条^{ほうじょう}県、深津^{ふかつ}県の3県に統合され、明治8(1875)年には岡山県、小田県(深津県から明治5年に改称)が合併し、さらに明治9(1876)年4月に岡山県と北条県が合併するとともに、岡山県に属していた備後6郡が広島県に移管されて、旧備前・備中・美作一円が一つの県となり、ほぼ現在の岡山県の姿になりました。

このころ岡山県の県庁舎は、現在の岡山市北区弓之町にありましたが、明治12(1879)年、天神山(現在の天神山文化プラザの辺り)に新築されました。

岡山県の成り立ち



※ () 内の数字は明治の年月を示す。
例えば、(4.7) は明治4年7月。

※明治4(1871)年11月から明治5(1872)年6月まで、鴨方県・生坂県は岡山県に編入。

●小田県庁跡（笠岡市笠岡）

市指定史跡



小田県庁門

廃藩置県によって、備中国と備後国東部6郡には深津県が置かれました。当初は備後国深津郡（現在の広島県福山市）に県庁が置かれていましたが、位置が県の西部に偏っていることから、明治5（1872）年6月に県庁が小田郡笠岡に移され、県名も小田県に改称されました。小田県庁は、現在の笠岡市立笠岡小学校の場所にありました。笠岡は江戸時代の大半が幕領（幕府の直轄地）で、この場所にはかつて笠岡代官所が置かれていました。この小田県庁の門は、もとは旗本戸川氏の妹尾陣屋の門であったものを移築したもので、現在は笠岡小学校の門として使用されています。小田県庁跡は笠岡市の史跡に指定されています。



市指定重要文化財

●北条県庁南門 (津山市西寺町 成道寺)



北条県庁南門

北条県は、明治4(1871)年、津山県、鶴田県、真島県及び倉敷県の一部などが合併して設置されました。県庁は旧津山県庁に置かれました。現在の津山文化センターのあたりに造られていた旧津山藩庁の建物を利用したもので、庁舎の平面図が残されています。

北条県庁の南門は、成道寺(津山市西寺町)の山門として移築され現存し、津山市の重要文化財に指定されています。

はんせきほうかん
版籍奉還

旧藩主が版図(=土地)と戸籍(=人民)を天皇に返上したことをいいます。明治2(1869)年1月、まず薩摩・長州・土佐・肥前の4藩主が願い出て、それによって、藩主は知藩事に任命されました。



周辺
地図



所在マップ



- | | | | |
|---------------------|-------------------------|-----------------------|--------------------------------|
| 1 青佐山の台場跡
浅口市寄島町 | 2 下津井の台場跡
倉敷市下津井 | 3 横井上の台場跡
岡山市北区横井上 | 4 井原知行所陣屋跡
井原市井原 井原市立井原小学校内 |
| 5 大橋家住宅
倉敷市阿知 | 6 倉敷代官所跡
倉敷市本町 | 7 浅尾藩陣屋跡
総社市門田 | 8 鶴田藩西御殿跡
津山市桑下 |
| 9 西爽亭
倉敷市玉島 | 10 熊田神社・臥牛亭
高梁市内山下 | 11 有終館跡
高梁市中之町 | 12 瀧善三郎義烈碑
岡山市北区御津金川 七曲神社 |
| 13 小田県庁跡
笠岡市笠岡 | 14 北条県庁南門
津山市西寺町 成道寺 | | |

発行日 平成27年12月22日

発行 岡山県教育委員会

編集 岡山県教育庁文化財課

〒700-8570 岡山市北区内山下 2-4-6 電話 086-226-7601 (直通)

協力 高梁方谷会、岡山県立記録資料館、岡山県古代吉備文化財センター、岡山県立岡山城東高等学校、岡山県立博物館、岡山市立岡山中央小学校、岡山市立芳泉中学校

表紙写真 上：小田県庁門 中：山田方谷肖像(写真提供 高梁方谷会) 下：瀧善三郎義烈碑